

「無思想の発見」 養老孟司著 ちくま新書

(一人称の不思議)

自分を表現する日本語は数多い。ワタシ、ワタクシ、オレ、オイラ、ボク、小生、拙者、身共、それがしなど、他の言語では、自分を表現する言葉は一つで済む。自分を示す言語が沢山あると言う事は、実は「定まった私」なんて無いと言う事ではないのだろうか。ジブンと言う言葉は、関西弁では相手を指す事がある。「ジブン、人参嫌いやろ」などと相手を指して言う。「アンタ、人参嫌いだろ」と言う意味である。関西だけではない。江戸の店屋の番頭が、揉み手して「手前どもは・・・」。所が、下町の喧嘩になると「テメー、この野郎」と言う。テメーは当然「手前」に由来する。或は、小さい子に対して「ぼくちゃん、駄目よ。そんなことしちゃ」と叱っているおばさんがいる。此処でもボクは、アンタと言う意味である。要するに日本語では、俺とお前はお互いに行き来する。こんな言語が他にあるであろうか？これは単に「状況に依存するその場の表現に過ぎない」のである。その根底にあるのは「実体」にたいする深い確信である。だから、日本では以心伝心なのである。

英語で、I can speak Japaneseと言う。アイと言う主体・実体が歴然としている。こういう言語を毎日使っていると「主体的自己の存在」なんて当然だと言う事になる。しかし、その人が日本に生まれていれば「アイという主体なんて、何処にもなくなる」つまり、脳味噌が自分の都合で勝手にそう言っているだけである。俺もお前も一緒くたの世界に、ある日突然、実存的主体としての「自己」が侵入してきた。これを西欧近代的自我と呼ぶ。英国に留学した夏目漱石は、近代的自我を良く知っていた。しかし、漱石は近代的自我を導入せよと主張したわけではない。西洋風の「個」と「世間」との対立を、身を持って感じ大いに悩んだ。だから胃潰瘍になったのである。西洋の「個」には長い歴史があり、社会的必然がある。それが無い日本の世間に「自我」だけ入って来ても、根本から定着するはずがない。

日本語に於いては、「私」と言う言葉が「自分」、個人self という意味と「公私の別」と言う時の「私」private という二重の意味を持っている事自体が普通ではない。日本の世間における私と言う最小の「公的」単位、それは個人ではなく「家」であった。新憲法はそこに「個人」を持ち込んだ。「自分」が最小の私的単位だと「公」に決めたのである。西欧ではその公権力に枠をはめた。公が私に干渉してはならない範囲、それを「人権」として定めたのである。首相が靖国に参拝すると、ジャーナリストが「公人として、ですか？私人として、ですか？」と必ず聞く。私が首相なら「個人」ですと答えるであろう。(1)

憲法はその「個人」に思想・信教の自由を与えているからである。江戸の人が「公私の別」を如何に良く心得ていたか、それは襲名という習慣に示されている。これは役者だけではなく、問屋、大商人、庄屋にも同じ習慣がある。ある問屋で、主人が代わる。代が替ると言う事は私的なことである。お得意さんには無関係である。そこで主人が襲名するのである。名刺だって同じことだ。肩書を名刺の真ん中に印刷すれば良い。どうせ、会社の人事が替ったら別の人がやって来るのだから。

(誰が自分を創るのか)

実存的主体としての私なんて無い。意識的な私とは実は「点」であって中身がない。まさに「われ思う、ゆえに我あり」である。その「我」の内容は「思う」としか規定されていない。「私」日々変わっていくのに、意識はひたすら「同じ」を繰り返す。ジョン・ロックは言う「たとえ指を切り落としたとしても、自己が減ずることは無い。肉体は自己ではないからである」と。イギリス人であるロックは「自分は身体ではない、身体は自分ではない」と思っているらしい。これは西洋がキリスト教世界で、キリスト教では「靈魂不滅」だからである。身体は靈魂の仮の住まいなのである。そうでないと神は「最後の審判」が出来ないからである。「永遠に変わらないものとしての魂」が無ければならない。だから「自己同一性」が暗黙の内に当然視されるのである。西欧の「近代的自我」と言うのは、中世以来の「不滅の靈魂」を近代的・理性的に言い替えたものだと私は思っている。

多く人は「同じ」と「違う」を単純に反対語だと思っている。でも、全く同じものはない。目の前に二つ何かがあれば、それは「違う」ものに決まっている。感覚で吟味すれば、物事は全て「違ったもの」である。それを概念化すれば「同じもの」になる。つまりそれは反対語と言うより補完的なのである。私が思っているリンゴとあなたが思っているリンゴは「同じリンゴだとお互いに思っている」からである。しかし、あなたが思っているリンゴが、客観的に同じものかと言ったら、そんな保証は無い。意識内容に個性があると、互いに了解出来ない。違いがあると言う事は「わからない」ということである。「全く違うと言う事がわかった」というのは「わからない」と同じ事ではないのか？他人の目と自分の目と、自分について「合わせて行くこと」、それが完全に出来るようになれば「心の欲するところに従って、矩を越えず」となるであろう。無人島に住んで「俺は個性的な人間だ」と威張っても意味がない。それが、つまり「自分を創る」ことである。

(我々に思想はあるのか)

(2)

「哲学や思想って抽象的なものだろう。そんなもの現実とは関係ない」これがまさしく「日本の思想」そのものである。この文には具体的な言葉は入っていない。「抽象的断言」なのである。これこそ哲学であり、思想ではないか！その裏に、「自分に関係があれば現実だが、関係が無ければそれは思想だ」と言う事を暗に決めていないであろうか？しかし、思想であろうが現実＝世間であろうが、皆脳の働きで、それは脳の中にしか無いからである。そうでは無いと言うのであれば、貴方が熟睡している時、「あなたにとっての思想や現実」がどこにあるのか教えて欲しいものである。私は「世間は思想だ」と言っているのだ。頭の中で並列しているからである。それを認めるなら「世間と思想は補完的だ」とも言える。そうであるなら、世間の役割が大きくなるほど、思想の役割は小さくなるはずである。頭の中で世間が大きい人ほど現実的であり、思想が大きい人ほど思想的な人なのである。世間が大きく思想が小さいのが日本人である。逆に、偉大な思想が生まれる社会は、よく言えば「世間の役割が小さい」、悪く言えば「世間の出来が悪い」のである。

何故、日本人は「自分に思想が無い」と思ったがるのか？一つには謙虚さであるが、もう一つは「自分には思想が無い」と思った時から、それ以上思想について考える必要がなくなるからであろう。言うならば、最も経済的な思想であると言える。「無い」ものを考える事が出来ないではないか！これは信仰についてもいえる。「何も信じないことを信じる」のが一番楽なことはすぐに分かるであろう。しかし、外国人に「無宗教」と言うのは、気を付けた方がいい。外国の「無宗教」とは、確信犯としての無宗教、「思想」としての無宗教だからである。思想、哲学、宗教などを無理して持たなければ、特に考える事もない。必要なら、何かの思想を借りて置けばよい。その借り物が都合が悪くなったら「取り替えれば済む」これが明治維新であり、戦後ではないか。山本七平氏は、日本の中心には「真空がある」と書いた。真空とは「絶対的に何も無い」と言う事である。哲学も思想も吸い込まれて無いのである。又、加藤典洋氏が「日本の無思想」の中で「表現され、表に顕されなければ、思想の意味がない」と主張している。これに対抗しようとする「俺には思想が無い」と言うか、ひたすら黙るしかない。私は「価値があるものはない」と言っているわけではない。「存在であれ、価値であれ、要するに脳の働きだ」と言っているに過ぎない。つまり精神も物質も階層を付けない、上下が無いとも言い替えられる。

(無思想と言う思想)

日本には「思想が無いという思想がある」という「真空原理」が存在する。そう言う文化の中で、自前で何か考え、主張しようとする厄介な事になる。基本的には無視されるであろう。

「世間の思想」に反する思想を持つ事は許されないからである。但し「借り物」なら許される。日本人の責任ではないからである。従って、外来思想で埋め尽くされているのである。中国や韓国が、敗戦前と後では、思想をどう改変したのかそれを知りたいと「歴史問題」というキーワードで言っても「俺には思想なんて無い」という人達の集まりでは回答のしようが無いのである。そう言う時に日本人は、ただ「やもうえない」「やもうえなかった」と言うのである。この表現は「現実が思想を圧倒した」と言う時に使われる。そもそも「ない」のだから「説明の必要がない」のである。

私は今、「俺には思想なんか無い」という思想を、維持するにはどうしたらいいのかを考えている。日本の世間が、思想が無くてもやって来れたのは、世間という「実状」があったからである。所謂、「現実」が存在したからである。明治の人は「和魂洋才」と言った。和魂とは世間の習慣である。例えば、日本語、規制、盆暮れの挨拶それらを一切含んだシステムを和魂と考えた方がいい。しかし今や、その和魂、即ち世間が危ない。世間が最早しっかりして居ない。「思想が無い」社会で「世間という現実」が危うくなれば、すべてが崩壊に近づかない。こういう世間で、思想が危険視される理由もよく分るであろう。「思想」を主張するなら、現実を無視する。つまり世間をあえて、無視するしか具体的な表現手段がないからである。三島由紀夫も大塩平八郎など思想的に行動した人達は、早い話テロになった。思想の存在を主張するなら「世間的には全く意味のない行動」として、自己の思想を示すしか方法が無いからである。世間の、「何故、あんな無茶なことをしたんだ」という疑問が起きれば「ひょっとすると、あれが思想というものではないか」という懸念が、次々と呼び起こされ、行動は極端になるほど有効だと言う事になる。だから思想なき世間では、思想は益々危険なものとなる。「思想と言うものが無い思想」とは「一つの思想」であって「唯一の思想」ではない。それが「唯一の思想」になった時「思想」は死ぬのである。私は「思想なんか無い」という伝統的な日本思想を信じ、それを生かし続けたいと思っている。その思想をどう深め、これからどうやって上手に生かしていくか、が大切だと思っている。それには、思想というものを丁寧に理解するしかない。又、同時に世間と言う思想、即ち「現実」の健康さを確立しなければならない。

(ゼロの発見)

「思想なんてものはない」これは思想における「ゼロ」の発見である。ゼロには二つの意味がある。一つは、数字としてのゼロである。マイナス1、ゼロ、プラス1と数字を並べた時の、数字の中の一つの数字である。他方、ゼロと言う数を一取り出して、その意味を考えると、それは「数字が無い」事(4)

を意味している。日本の「無思想」も「無宗教」も決してニヒリズムではない。数字のゼロだと思えばいい。思想が無いと、それを補完するものとして現実が発生する。それが世間と言う現実である。世間＝思想という定義を持つ人にはその区別の必要がない。では、思想と現実の違いは何か？ 現実には5感で捉えられるが、思想はそうはいかない。 物体は「5感から入力する」脳の機能であり、ただの物体なのである。思想は言葉で捉えられる。 言葉は音声か、文字か、点字でしか捉えられない。文字は普通物体ではない。しかし、思想も脳の機能である事には変わりがない。「やる事見てれば、何を考えているか分る」と言われている。入出力の間に挟まった、脳という情報処理装置は、自分の内部で入出力を「回し」始める。それが考えると言う事である。思想が「表現に顕されなければならない」というのは、思想が5感では捉えられないからである。言葉とか行動として外に出さなければ、他人はそれを把握できない。しかし、人間は意見を隠し通すことが出来ない。取りあえずそれを「ごまかす」事は出来る。それが長けた人を政治家と言う。また、自分をごまかし続けて一生を過ごしてしまう人を「幸福な人」と言う。

感覚世界、つまり物体の世界を一つの楕円で示し、概念の世界を、その上に位置するもう一つの楕円で示す。その両者の重なりが「言葉」である。 感覚の世界は「違い」によって特徴づけられる。概念の世界は「同じ」という働きで特徴づけられる。それが重なり合う「言葉」は「同じであって、違うものだ」と言う事になる。言葉という道具は、この二つの世界を結びつけることが出来るのである。 私の声とあなたの声とは違う。しかし言葉の上では「同じ（ネコ）」という言葉」として把握される。文字についても事情は同じである。つまり聞く側が「あいつはネコと言っているのだな」と了解すればいいのである。一方。概念の方は「何故同じ」なのか？と聞かれても「脳の中では全てが神経細胞の興奮、つまり電気信号だから」と答えるしかない。

「思想は現実には干渉してはいけない」という原理が世界には有る。 そうすれば、思想は幾らでも羽を伸ばし、純粹であることが出来る。有思想の人はしばしば「現実が間違っている」と、とんでもないことを言う事がある。無思想の世界では、思想とは「現実無視の空論」であるしかない。「現実合う」思想なら、それは直ちに「現実化してしまう」からである。思想では無くなってしまふのである。世間でそれをやるのが自民党である。自民党の中では、思想は思想であることを許されず、直ぐ現実に転化してしまう。だから自民党には思想なんて無い。歴史は思想である。日中合同委員会が出来て、両者で歴史問題を討論したと仮定しよう。日本側の学者は、暗黙の内に、「歴史は現実には介入してはいけない」という原則に忠実であろうとするだろう。一方中国は有思想だから「歴史は現実に介入する」事を前提にするだろう。そこをお互いに気付かない。(5)

或は、気付かない振りをしているから、議論の收拾がつかない。「戦犯の墓に詣でる」ことは、戦犯の思想が現実介入する事である。と中国は考え、日本はそんな事は夢にも思わない。現に平和主義じゃないか！死んだ人は、日本では最早「仲間ではない」のである。だから戒名を付けるのである。「思想なんてない」という「ない」思想をどうやって説くのか？だからゼロの発見なのである。ゼロは確かに「ない」のだが、やっぱり数の一つである。それならゼロについて説明する事が可能なはずである。そもそも有思想で出来ている言葉で、無思想を説くことが出来るのか？これが日本人に与えられた世界的使命である。日本の思想とは、思想についての「ゼロ」の事だと外国人に説明してみたい。案外、理解を得るのではないかと思っている。

日本人が「形を重んじる」のは「思想が無い」からである。形には思想がいらぬ。こうして司馬遼太郎の日本論は「この国のかたち」となった。茶道なり武道なり神道など、日本的伝統的な「道」を思想として説明する事は困難である。世間では「理屈ではない」と言う。それは言葉ではなく、所作、即ち身体技法である。今では「説明しなければ、分らないじゃないか」と叱られる時代である。だから私は「説明すれば、分るのかよ！」と言って「バカの壁」を書いたのである。

般若心経と言え、ごく一般のお経である。この中の全文 266 文字の中に「無」という字が 21 あった。これこそ無思想の思想そのものである。脳には感覚入力があり、これを受けて計算を行い、行動と言う出力をする。この過程を般若心経では「受想行識」と纏められている。「受」は感覚入力、「想」はその計算、「行」は出力である。「識」は知識、又は意識している事と解釈される。仏教思想とは「脳から見た世界」である。有名な「色即是空」の「空」はゼロであって、「数は無いが、数字の一つ」と同じ意味であり、「無」はゼロの「数が無い」と言う方の意味である。

人は何故眠らなければならないのか？普通の人には「眠るとは休むことだ」と考える。所が、寝ていても起きていても、脳が消費するエネルギーはさして変わらないのである。起きていると言う事は意識があると言う事である。「意識とは秩序活動」である。無秩序とはランダムと言う事である。所が、熱力学によれば、どこかに秩序が生じると言う事は、その分の無秩序がどこかに生じたと言う事である。部屋を掃除すれば、ゴミは無くなり、「秩序が生じる」しかし、掃除機の中にゴミが溜まっている。その中をさらに掃除すると、ゴミ処理場に行き、そこでゴミを燃やし分子になる。すると全世界の無秩序量が増えた事になる。その無秩序を秩序に戻す事は出来ない。これを「エントロピーが増大する」と言う。

「意識」は脳の働きで、意識が働けば、それは秩序活動だから、その分のゴミが脳の中にも外にも溜まってしまう。この溜まったゴミは「寝ることによって、ひとりでに片付ける事が出来る。つまり意識活動と言うのは「意識がないこと」、睡眠と対になっているのである。この秩序を基礎づけるのが意識の持つ「同じ」という働きである。「意識と無意識とを足して」はじめてゼロになる。寝ている間に「秩序の回復」が行われているのである。物質としての私も、あるようで無い。分子自身は日々どんどん入れ替わっているからである。私と言う物質も「私の意識が考えているもの」に過ぎない。概念世界は要するに、「無」と「空」とで創られているのである。コンピューターはまさに、ゼロとイチだけで出来ているではないか。

知識人は「自分の頭は、他人と違って当然だ」とどこかで思っている。じゃあ、どこが「同じ」なのか？と訊ねると「人間本来の自分」みたいな回答が返ってきてしまう。極限状態でも成り立つのが「本当の自分」だと思わざるを得ないのである。私は、そんなものはないと主張したい。連れ合いを変えたり、商売を替えたり、戦争に行けば、つまり「外部条件」を変えれば「人は変わる」に決まっている。意識は、自分に対して、「同じ」を繰り返すのだが、外に対しては「違う」を繰り返す。外部を感知するのは感覚であり、外部は差異の連続である。現に身体は、細胞が日々再生している。自分の身体でさえ、意識にとっては外部である。他人の意識と自分の意識の間にあるものは、感覚であるから「相手の考えている事は分らない」のである。しかし、ミラーニューロンのような機構が働いているとすると「同じ」が、相手に直達しまう事がある。この「同じ」の世界に対する唯一の解毒剤が感覚世界である。感覚世界は「同じなんて無い、違いしかない」と言うからである。二つのリングは「リングとしては同じ」であるが、触って食べて見れば「違う」事が判る。しかし、世間では「リングはリングだろう」で話は終わる。言葉より下に「降りなければ」言葉を創る事が出来ない。だから現代人は、「既成の言葉をただ運転している」に過ぎないと私は言っている。それをコミュニケーションなどと称している。意識は「同じという強い働き」がある。それが言葉を創りだす。動物は言葉を使わない。動物の脳では、感覚世界、つまり「差異」の世界の方が「強い」、或は「大きい」のである。「同じ」は「違う」を前提とし、「違う」は「同じ」を前提とする。色即是空、空即是色、秩序は無秩序なのである。つまり、掃除機の中のゴミは、部屋の秩序と同時に発生し、相互に補完している。日本の世間は、無思想の思想が、「思想」である事さえ忘れてしまっている。つまり、信仰になったのである。信仰とは本来無意識なもので、意識的な信仰となったものが所謂宗教なのである。

だから、日本人は、自分は無宗教だ。思想なんてないと言うのである。

(じゃ、どうするのか)

人間社会は「同じ」を繰り返すことで「進歩」して来た。「同じ」という働きの典型が「言葉」である。日本の中に違う言葉話す人たちがいると、やがて「同化」される。現実人は人によって違うから一言で表す事が出来ない。一言で言うためには「同じ」にしてしまうしかない。現実 = 感覚世界を、意識は出来るだけ「同じ」に変えて行く。だから、何事も「アッラーの思し召し」と言う事になる。その方が、考えなくてよいし楽だから、と人々は言う。言葉こそが「同じ」と「違う」の間に、微妙な釣り合いを保つ。それを「怠けたら」世界はひたすら同一化してしまう。

「同じ」を繰り返して階層をつくる。一神教的世界に対して、「違う」感覚世界と、「同じ」概念世界を往復するだけで、「同じ」という世界を「上に上がろうとしない」日本人は珍しい存在ではないか。だからこそ、逆に、多様性の維持に関して、利点を持っているのではないか。思想が無いと言う態度は、いざと言う時には柔軟に対応する事が出来る、安定した世間を維持できるという利点もある。此処まで文明化しても、山林面積が、国土の7割に近い国家は世界に例がない。しかし、無思想の世界には、出力の方向性が無い。だから状況によっては、極端な行動が勃発し得る。神風特攻隊になったりする。無思想と言う事は、それを止めるべき思想も無いと言う事だからである。一方、有思想が陥る大穴は、「こうだ」と決めてしまうと、後は考えなくとも済む。それが原理主義である。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」と人は言う。自分で自分を変えるしかない。

「変わった」自分は、今までとは「違った」世界を見る。自分が変われば、世界全体が違って見える。人生は四苦八苦だ。でも、それが生きていると言う事なのである。幸い、いずれ、生きていなくても済むようになっている。ソクラテスが言っているように「それほど、長くない辛抱」なのである。

コメントと感想

著者は、「私」という自分を示す言葉が、日本語には沢山あるが、外国語には、自分を表現する言葉は一つである。それが「定まった私」なんて無い。と、「個」の自立を否定する。その代わりに「世間」が存在すると言う。しかも、日本語には「私」という言葉に self という意味と private という意味の二重の意味がある。こんな言語は他に無い。

日本には「思想が無いと言う思想がある」世間の思想に反する思想を持つ事は許されない。これは数字のゼロであり、又は、真空原理であると言う。(8)

そして、思想は 5 感で捉えられないから言葉とか行動として外に出さなければ他人はそれを把握できない。概念の世界は「同じ」という働きで特徴付けられる。その「同じ」を、上にどんどん上がって行くと抽象 = 思想になるという。そして、思想はえてして現実無視の空論になる。だから、日本人は、「ない」思想をどうやって他の人に説明するのか？という問題に直面する。感覚世界である現実を、意識は出来るだけ「同じ」に変えて行く。意識は、自分については「同じ」を繰り返すが、外に対しては「違う」を繰り返すのである。結局、自分を自分で変えて行くしかない。と著者は主張する。

私は、他人と議論する時、例え話や具体定事例に終始し、その原理、思想については殆ど言及しないことを不思議に思っていた。本質論を言うと、理屈を言うとか、危険視され無視される。本書を読んでやっとそれを理解できた。又、自己の確立と言っても何か違和感があり、賛意は得ても心の底からの納得は得られない。

日本人の無思想と西欧の有思想とどう調整するか？グローバル化と日本的価値観をどう調和させるか？と言う事になる。エネルギー資源や食糧を毎年 20 兆円以上輸入しなければならない日本は、少なくとも、それに見合う輸出をしなければ生きて行けない。それが「取引」である以上、お互いの信頼、信用が必須である。つまり、グローバル化は仕方がないのである。著者も「自分を自分で変えるしかない」と言っている。

話は変わるが、最近映画「スティーブ・ジョブズ」を鑑賞した。世界を変えた天才、アップル・コンピューターの創始者である男の物語である。実家のガレージから始めたアップル社は 4 年で上場し成功する。しかし開発にのめり込み、首になる。しかし、再度乞われて復帰し、CEO に返り咲く。そして、iphone や ipod を世に出す。56 才で、すい臓がんで亡くなる。彼は、天才ではあるが、わがままで傲慢、自分の考えは絶対変えない、昔からの友人でさえ追い落とす非情な反逆児である。

彼ほどの有思想家は居ないと思った。若い時大学を中退し、インドで禅の修行やドラッグを経験し、「人類を前進させるような事を実現したい」という思いから、アップル社を設立した。彼は、技術やビジネスに卓越していただけない。IT デジタル革命を創り出したのである。無から有を創ったのである。しかし、映画を観ながら『彼と一緒に仕事は出来ない。無理だ』と思ったのも事実である。